1月14日のメッセージ

聖書:ヨハネによる福音書 1: 35-51

「来なさい。そうすれば分かる」

今年も箱根駅伝が終わりました。「正月の風物詩としてなくてはならない」という人もいれば、「正月2日から5時間も6時間も走っている姿を見て何が面白いのか」という人もあるでしょう。かくいう私も20年ほど前までは後者の立場でした。しかし、百聞は一見にしかず。東京に来て、その熱狂ぶりを間近に感じて考えが変わりました。

もしかすると、宗教や信仰というもの似たところがあるのかもしれません。存在は知っているし、 信じている人がいることもわかっています。しかし、どうも自分からは遠いところにあるようなもの。 教会に来るまでの自分にとって宗教とは近くて遠いものでした。

洗礼者ヨハネの弟子たちにとってのイエスも、そのような立ち位置に見えていたのではないでしょうか。徹底的に一人の人間であろうとされ、ヨハネのところに洗礼を受けに来られたイエスです。弟子たちの目からは、他の一人と何ら変わることがありません。しかし、ヨハネは彼をして「神の小羊」だというのです(「そして、歩いておられるイエスを見つめて、『見よ、神の小羊だ』と言った。」ヨハネによる福音書1:36)。

だから、彼らの「ラビー『先生』という意味―どこに泊まっておられるのですか」(ヨハネによる福音書1:38)という問いは、単に居所を問うたというより、「あなたは何者なのか」と問うたことになるでしょう。もう一歩踏み込むならば、彼らはイエスに、自らが進むべき道を尋ねたと言ってよいでしょう(「どのようにして、若者は/歩む道を清めるべきでしょうか。あなたの御言葉どおりに道を保つことです。」詩編119:9)「来なさい。そうすれば分かる」(ヨハネによる福音書1:39)

救いの体現者であり、救いそのものであるイエスの答えはシンプルです。目の前に神が遣わされた救いそのものがあるのだから、ただそれに従うのみ。預言者サムエルの例に留まらず、人は神に呼ばれ、従ってきました(「主は三度サムエルを呼ばれた。……エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、サムエルに言った。『戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、「主よ、お話しください。僕は聞いております」と言いなさい。』サムエルは戻って元の場所に寝た。」サムエル記上3:8-9)。

そして、ここでもアンデレはイエスに従い、その兄弟シモンに証しします。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」 (ョハネによる福音書 1:41)と。

ペトロやアンデレが特別だから招かれたのではありません。イエスと同じようにただ一人の人間としてそこに存在しているだけで十分なのです(「しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して、……」ガラテヤの信徒への手紙1:15-16)。

アンデレがその喜びをシモンに伝えたように、フィリポもその喜びをナタナエルに伝えました(「フィリポはナタナエルに出会って言った。『わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。』」ヨハネに

喜びを知った者はその喜びを自分のところでとどめるのではなく、次の 人へ、そのまた次の人へと伝える役割へと招かれています。

よる福音書 1:45)。

ただし、私たち自身が救いを体現しているわけではありませんから、イエスのように応えることは難しいでしょう。

それでも、フィリポのように「来て、見なさい」と救いを指し示すことはできるはずです。そして、指し示すためには常にその方向を向いていなければなりません。

アンデレたちが「どこにおられますか」と問うたように、絶えずイエスを探し求める私たちでありたいと思います。「来なさい。そうすれば分かる」とのイエスの言葉に、常に従う私たちでありたいと願うのです。

